

雑居ビルを吹き抜けた風

——『同志社外国文学研究』終刊によせて——

山本雅昭

終りというもののはつねにいくばくかの悲哀をともなう。第二外国語研究室はすでになく、ここにまた、四半世紀にわたつてぼくらが研究活動の場としてきた紀要『同志社外国文学研究』が廃刊になるという。止むを得ぬことはいえほくもいささかの感慨を禁じ得ない。

『同志社外国文学研究』を支えてきた第二外国語研究室は、二十年の余、今出川は弘風館五階に陣取つた。同志の歩みをふり返るときぼくはどうしても弘風館五階を、ぼくらの日々の生活の場であつたあの弘風館五階のことを思わないわけにはいかない。雑誌とあの空間とを切り離して考えることができないのである。金網で囲つた書庫を中央に、そのぐるりをぬつて縦横十文字に走りめぐる狭い通路、まわりにへばりつくようにして犇めき合う個人研究室、昼なお暗くいかにもせせこましいそこは、言へば先斗町あたりの雑居ビルを思わせるような所だつた。そんな雑居ビルの中でしかしいちばんだいたいな場所やはり会議室ではなかつたか。定例の研究室会議の部屋だつたからではない。ラウンジなどというしゃれた名前のない時代である。ありようを言へばまず休憩室といったところだつたらう。ほとんど常時誰か彼かがお茶を呑み、お喋りをし、昼どきなら弁当を使い、夕暮れには長椅子にごろりと横になつたりしていた。そうして、ひとしきり時間を潰すとまた自室の、ついさつき離れたばかりの仕事机の前へと戻っていく。日常はこのくり返しだつた。それぞれに勝手な仕方好きな仕

事をしながら、まるで句読点でも打つように合い間合い間に部屋を出てはうねうねと折れ曲った通路を抜けて、誰かしら同僚の顔を見にいくのである。目の前にあるすべての時間が自分の時間であり、それは野放図なまでに自由に満ちた時間であり、しかも自分ひとりだけでいることに耐え難くなるほどに濃密な自由の空気の漲った時間であったから、誰もがみな、一瞬己れを解放する必要があつたのだろうか。会議室での一服の煙草、一杯の珈琲、ひと言の冗談。それで足りなければ陽の落ちるのを待つてそこから夜の街へとくり出していくまでだ。そうした場所で会議室はあつた。贅沢をしていたのである。いや、限りなく贅沢を許す風が、かなり長いある一時期、弘風館五階という空間を吹き抜けていたのである。それはむろん先師先人の遺したものをほくらが受け継ぎ守ってきた風ではあつたが、同時にまたそれによってほくら自身の内なるなにかが養われていた風でもあつたであろう。そのほくらの内なるものを、すこし大仰に二外^{ニガイ}の精神^{セイシン}とも呼ぶなら、まさに二外の精神を形にしたものこそが雑誌『同志社外国文学研究』に外ならなかつた。たとえば、こういうことである――

『同志社外国文学研究』に全国の紀要にあまり見かけない発表形式^{シヤンシキ}がある。論文、書評などと並んで〈研究ノート〉とあるのがそれだ。これを字義ど通りに研究のためのノート^{ノート}と思つて読むと、すぐとんだ見当違いであることに気づかされる。りっぱに〈論文〉なのである。正確に言えば、〈論文〉に数えてもすこしも差支えないものなのである。いったい「書く」ということはなににしる手間ひまのかかる仕事である。〈研究ノート〉と称したところで力も要れば時間も取られることは〈論文〉となんら変らない。だが〈論文〉を〈ノート〉とするだけで肩にはいった力がちよつと抜ける。抜ける気がする。この気がするが肝腎なところで、ともかくもそれで内容の本質と関わりのない点につまらぬ神経を遣わねばならないという鬱陶しさから救われる。学術論文の規格、といったものがほくらの仕事にあるのかないのか知らないが、あろうとなかろうと端^{はな}から気にしないぶん発想が自由になろうというものだ。第二外国語研究室が、それまで仮住いしていた『人文学』から

独立して自前の雑誌を持ったときこの発表形式^{ジヤンル}を創ったのは、先人たちの叡智であつたとぼくはずつと思つている。ここから過去多くの独創的な仕事が生まれているのはけつして偶然などではない。

居は氣を移すという。ぼくらがあの小暗くうす汚れた狭苦しい弘風館五階から、石炭酸の臭いでもしそうな衛生的でじつに明るい近代的ビルにひつ越してはや十年になる。なにかが変わつただらうか。とくに變つたとも思えぬが、しかしまた大いに變つたような氣がしなくもない。いま本誌の終刊を迎えて、かつての雑居ビルが、あの中を吹き抜けた風が、あらためて妙に羨ましく思い返されるのはなぜなのか。もしそれがぼくの単なる懐古趣味でなく感傷でもないとするれば、それはたぶん、やっぱり現在ただいまのぼくの身の置き所のせいに違いない。ぼくの心が充分に解き放たれていないからに違いない。いやそのまえに、それから解き放たれねばならぬほどに濃密な自由の空氣じたいがいまここにあるのかないのか。話はそれからだ。

まもなく新たな学会、新たな紀要へとぼくらの活動の場は移っていく。眞の創造が精神の全き自由からしか生まれ得ないものなら、せめてそこだけはいつも爽やかな風の吹き抜ける充分に開かれた場所にしておかねばなるまい。